

## 中小河川流域の歴史的景観と近世の開発

——近世絵図による復原法を用いて——

阿部 昭

### はじめに

大名家文書のなかに領分絵図、また名主文書のなかに村絵図が残されている例は少なくない。しかし、これを本格的に利用した地域史の研究となるとまだその例は多いとはいえない。<sup>(1)</sup> 歴大な量の藩政文書や名主文書が残されているだけに、近世の地域史研究は、いわゆる文書・記録類の分析に追われ、心ならずも絵図類や現地の歴史的・地理的景観さらには聞き取り調査などによって得られる情報の利用を二の次にしてきたきらいがある。

古代・中世以来の歴史的経過がよく解明されている場合はまだ良いが、文書・記録もなく、文献からは中世はもとより近世初期のこともほとんど分からないまま、近世前期や中期から突然研究を始めなければならぬことがしばしばある。このようなとき、幸いにして近世の絵図を使用することができれば、これによって研究しようとする対象地域の歴史的・地理的条件について理解を深めることができる。

もとより、近世の絵図は、近代科学の発達した今日作成される地図

類とはたいへん趣を異にしており、正確性に欠ける点もあるし、何よりも先ず、絵図それ自体が歴史資料であることから作られたさいの作成者の意図を探ることをはじめ、他の文書・記録と同様の厳密な史料批判を要すると考えなければならない。そのためには、絵図を単独で使用することなく、近世絵図を相互に突き合せ、明治以降の地図類<sup>(2)</sup>とも比較し、関係する文書・記録類との照合も行つて、描かれた事柄の読みを深めることが重要である。

しかし、史料批判が十分なされた上であれば、近世の領分絵図や村絵図は、その当時の歴史的・地理的景観の復原において役立ち、地域史の研究に絶大な力を発揮する。復原された歴史的・地理的景観は、前時代から継承され発展してきたものも多いから、当時の状況から逆に過去をある程度推測することも可能である。

このような研究方法によって、近世前中期の絵図から、先ず当時の歴史的・地理的景観を復原し、それからさらに近世初期あるいは中世における景観にまで科学的想像をある程度まで及ぼしうると考えられる。

小稿がここで研究対象とする地域は、江戸時代に下野国河内郡にあった秋田藩（佐竹氏）の下野飛地領を中心とする地域である。同地域は、現在大半が栃木県河内郡南河内町の町域内にあり、一部分が小山市（旧都賀郡）内に属している。<sup>(3)</sup>

同地は鬼怒川の支流で河内郡北部に源流をもつ田川の下流域にあたり、その南端は結城城下から一キロ、中心部分でも五、六キロメートルの距離にある。東を鬼怒川とその自然堤防で画され、西は宇都宮・上三川方面から続く緩やかな洪積台地（祇園原台地）が境をなしている。その中央の低地帯は田川の氾濫によって形成された、標高差の少ない平かな沖積地で、中央やや東寄りを田川が今も流れている。低地帯の土壌は、一部を除けば大体が下層に砂礫質を含む壤土で現今の農業条件には恵まれている。

同地は、古代には下野薬師寺<sup>(4)</sup>が置かれ、隣接地に下野国衙や下野国分寺・国分尼寺があることから、東国の仏教文化の二中心とも目されるが、中世には下野の豪族である小山氏や宇都宮氏、さらに常陸の結城氏などに挾撃された地域で、その支配関係の帰趨も明確でない。戦国末期になり在地の土豪小領主のなかに、結城氏の被官となり、「一疋一領之侍」にとりたてられる者が現れることから、わずかに結城氏の支配の系譜をたどれるのみである。

近世を迎え、結城藩領を経て徳川家康の代官頭伊奈備前守忠次の支配下に入り、次いで秋田藩佐竹氏領となり、以後明治維新まで大きな変化はない。しかし、その近世初頭の転換期については、その重要性

にもかかわらず史料が少なく、特に、田川が濫流する低地帯の開発の進展状況と、近世村落の成立過程の問題は、藩政史料からも、名主文書からも容易に明らかにならない。

そこでこの点について、史料の空白を補う意図で、秋田藩下野領に關し残された近世の領分絵図と村絵図を用い、前述のような歴史的・地理的景観の復原法による考察を加えることで、同地域における中世から近世にかけての開発過程を説明するとともに、合わせて開発の進捗と村落編成の相互関係についても、その歴史的経緯を明らかにしたいと考えるものである。<sup>(5)</sup>

## 一 天和期の景観と開発状況

### (一) 秋田藩領分絵図

最初に先ず領分絵図を用いて、近世前期の秋田藩下野領の景観を復原する作業から始めよう。近世の秋田藩下野領に関する領分絵図は、管見の限り現在三種類のものが残されている。これを年代順に上げると次のとおりである。

第一は、「天和元年（一六八二）十一月薬師寺村外九ヶ村申出図」<sup>(6)</sup>（第一図）で、裏書に天和元年霜月廿日の日付で、「表書之絵図私共案内仕、他領境迄不残書為写、御絵図相極申候、」とあり、薬師寺村外九ヶ村の名主・老百姓が連署している。絵図の名称は後筆の裏書による。秋田藩下野領の領分絵図としては最古のものである。

第二は、「享保十五年（一七三〇）下野領絵図」<sup>(7)</sup>で、原図に表題は



ないが、裏書に「享保十五庚戌年今宮大寺殿江戸詰方之節、從江戸被差下候御絵図」とあり、享保期に幕府の命により、秋田藩で行われた領分絵図の取り調べの際に作られたことが明らかである。

第三は、「天保三年（一八三二）野州御領絵図」<sup>8)</sup>で、裏書に「仙北郡大沢郷に野州御領之内薬師寺村飯田村御引替ニ被成候節、於野州御領御絵図從江戸持下候事」とあることから、作成の意図や年代が推定できる。

これらの絵図はいずれも二尺四寸Ⅱ一里、すなわち縮尺五千四百分の一で描かれており、第一の天和絵図を原図として、それと現実との相違を糾す意図から第二、第三の領分絵図が作成されたものと思われる。

ただし、第二の絵図が、享保期に開削された吉田用水<sup>9)</sup>などの変化を正しくとり入れているのに対し、第三の天保期の絵図は、領分替え<sup>10)</sup>に関する以外は、ほとんど天和期の絵図の内容を機械的に踏襲するだけで済ましているかに見え、近世後半に起きた変化を反映しているとは思えない節がある。また、後述するとおり、これらの絵図はもともといずれも領分絵図として作成されたという制約があり、そのことを相当地に考慮して、他の史料と突き合わせた史料批判が必要である。

しかし、ともかくもこれらの領分絵図によって、近世前中期における秋田藩下野領の景観の大略を知り得る。したがって、これをさらに明治期の地積図をはじめ迅速測図や昭和期の旧村管内図、あるいは今日の町域地図等と比較することで、近世前期から現在に至るまでの同

地域の景観の歴史的变化の概要を捉えることができる。

領分絵図に描かれる事柄を整理すれば、一、領内に建設された役所・高札・御鷹屋敷など領主支配に直接関わる施設。二、村やムラ（小名・枝村・集落等を含む）と大小の道。三、川・用水・池泉・溜池・堰・堤などの治水利水施設。四、社寺・古城と並木・森林。五、郡界・領分境・「水替」等、実に多岐の問題にわたるが、ここでは対象を本稿の当面のねらいである沖積低地の開発に関わる点に限って考察を加えていこう。

まず「天和元年十一月薬師寺村外九ヶ村申出図」（第一図）から近世前期の歴史的景観の復原に努めつつ、当時の開発の進展状況を見ていきたい。なお、第一図の部分を拡大した第二図と、第一図を見易くするために作成した概念図である第三図を併用して考察を加えていくことにする。

第一図では先ず領分境が画され、さらに小判形の色分けでも秋田藩領の村と他領の村、また所属する郡の区別が成されている。領分の西境に日光道中の並木が見え、東境近くを鬼怒川の支流である田川が流れている。絵図の中央を北から南に抜ける道は、日光道中の石橋宿から常陸の結城城下へ通じる結城街道である。

日光道中と田川の間には、台地と低地帯の双方に多くの村々（小名や枝村を含む）が展開し、それらを結ぶように結城街道をはじめ大小さまざまな道が走り、田川・江川・四ヶ村用水・蟹川用水・坪山用水などの水系が縦横に流れている。

表1 秋田藩下野領の石高の推移

村 名	正保郷帳	(田方	畑方)	元禄郷帳	天保郷帳	旧高旧領
町田村	525.5	(349.2	172.5)	555.1	551.7	551.7
田中村	436.1	(347.5	88.5)	512.1	493.2	493.2
薬師寺村	1166.6	(648.8	520.7)	1555.4	1673.5	1664.0
仁良川村	702.8	(419.3	288.1)	861.6	1033.5	1033.5
東根村	484.6	(398.4	86.1)	551.2	538.7	538.7
磯部村	581.4	(163.2	415.2)	617.3	580.4	580.4
絹板村	376.7	(204.4	188.0)	360.1	351.1	351.1
花田村(絹板枝郷)	—	( —	— )	18.0	55.4	55.4
山田村	153.5	(104.4	49.1)	164.1	196.4	196.4
飯田村	50.0	( 22.5	27.5)	200.2	222.7	220.8
萱橋村(上萱橋村)	422.9	(255.3	167.6)	422.9	467.5	467.5

ここで特に注目すべきは、田川の流路とその周辺の低地帯の開発状況である。天和期の河道や堤の形は河川改修後の今日と比べ大きな相違を見せている。今は直線的にゆるやかなカーブを描いて流れている田川の河道は、当時は各地で大きく屈曲し、何カ所かさらに大きく屈折した旧河道の跡が描かれている。当時、増水すると実際にそこを水が流れていたものと思われる。

帳による村高の推移からすれば、遅くとも十七世紀の半ばには、近世の農業生産の基本構造をすでに十分につくりあげていたと思われる、水田化の進展度も相当のものであったと推定されるのである。

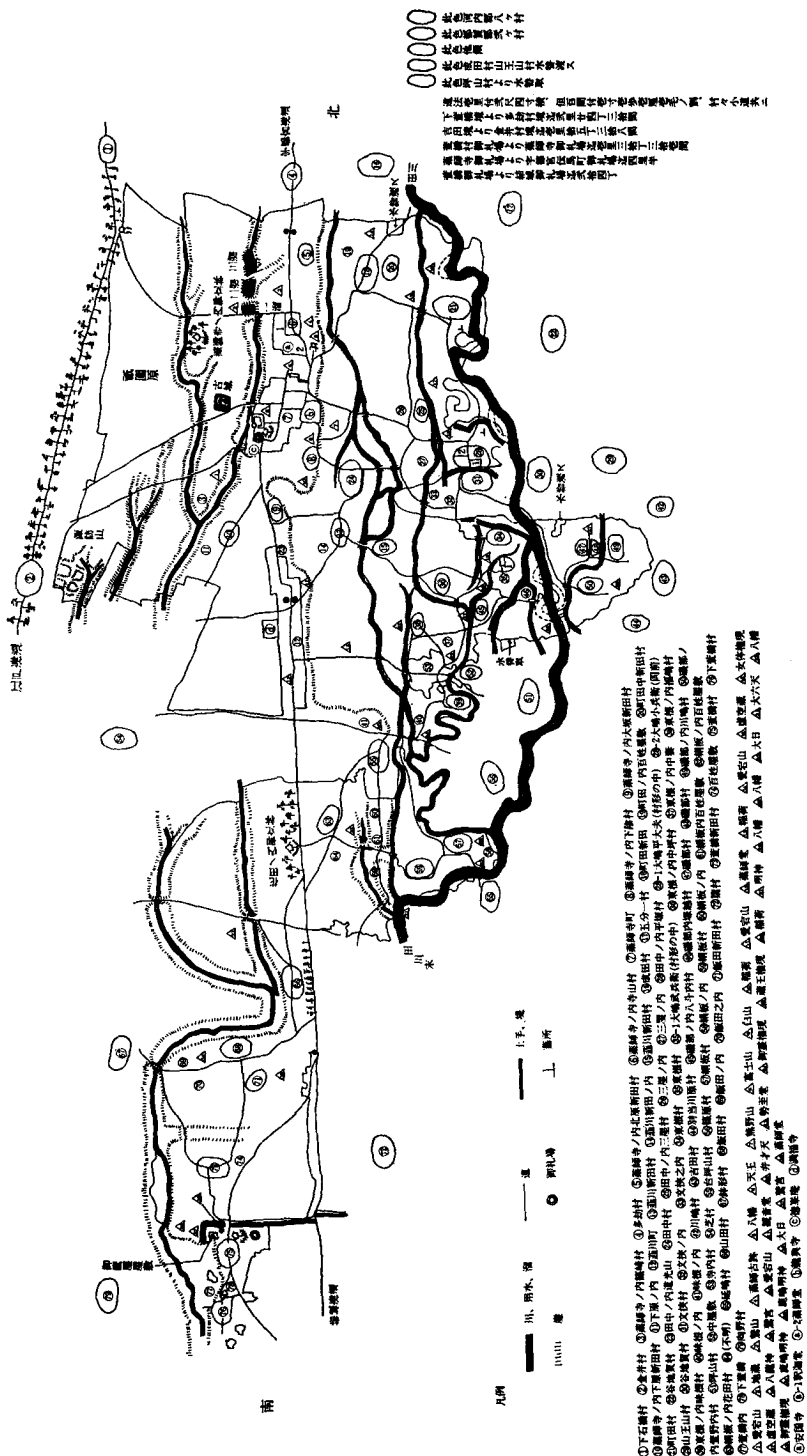
(二) 治水水利施設の状況

前節でみたような開発状況をさらに検討するため、天和期の領分絵図(第一・二図)に描かれた治水水利施設について分析しておく。

特徴的なことは、屈曲して流れる田川に堤防が少ないことである。描かれた堤は全部で三カ所にすぎない。そのうち南端近くの萱橋付近に鍵状になって東西に長く続く土塁と空濠は、別の絵図の検討や現地調査の結果から考えて、田川や他の用水と、まったく無縁な台地上に造られており、おそらくは中世に何らかの軍事上の目的で築造されたものと考えられる。残りの二つ、すなわち田中村の「平塚」付近と、東根・磯部両村付近に見られる堤は、田川の濫流を防止する治水目的で築造されたものと思われる。

「平塚」の堤は、天和期の領分絵図がその初見であるが、東根付近の堤は、「延宝九年東根村絵図」(第八図)で、すでに延宝期から存在が確認され、しかも実際にはこの堤の北側にもう一筋の堤があったことも分かる。すでにあったはずの外側の堤が、領分絵図から省かれた理由は、おそらくその場所が旗本知行所の谷地賀村地内で、秋田藩の領分外であったからと思われる。ここに領分絵図の特徴があり、使用する際に、こうした点を注意しなければならない。

第三図 第一図から作成した概念図（秋田藩下野領分絵図）



治水用の堤は、いずれも明治後半以降に築造されるようになった直線的な連続堤ではなく、局所的に水防の必要な箇所を囲い込むだけの霞堤で、前後は自然堤防を残すのみで流水に向かって開かれたままである。これは、関東流とか備前流とか呼ばれる近世の伝統的な治水技術<sup>(13)</sup>で、自然の地形を巧く利用し、河床を掘り下げる低水工法と霞堤で川の流れを屈曲させ、水勢を弱まらせながら、増水時には堤の切れ目から水を溢れさせ、周辺を遊水池化して増水を拡散させ、洪水の被害をできるだけ小さくしようとする狙いがあるとされる。

第一図に表れる二つの堤と田川から取水する諸用水が、十七世紀後半に出来ていたことは間違いないとして、それ以前いつごろまで遡れるかは、近世以前における、この沖積低地の開発史そのものに関わる問題であり、この地域の近世村落共同体編成上の問題とも関連させた詳細な研究が必要である。

「天和期の領分絵図」には、田川から取水する以外に、いくつかの用水が注意深く描かれている。まず、西部台地上を枝状に走る谷地の用水が、北部（薬師寺西部）と南部（山田・飯田・萱橋）にそれぞれいく筋が見える。北部の谷地の奥には、三重に持えられた溜池が見え、これらは後述するとおり、東側の田川流域の低地帯の開発に先んずる歴史を持つと考えられる。東部低地帯でも、台地のすぐ東崖下を流れる江川用水は、その水源から見て、四ヶ村用水や蟹川用水など田川から直接に取水する用水とは異なる性格をもつと考えられる。いずれにせよ、これらの用水は十七世紀半ばにおいて、既に相互に関係しあい、

複雑で高度な発達を遂げている。

一般に大河川の流域の用水が本格的に成立するのは、土木技術の飛躍的な進歩を見た近世に入ってからと言われるが、田川から取水する用水をはじめ、この地域の各用水がいつごろからどのような経緯をたどり成立するか、その水源や用水の開削、さらに前述の治水用堤の築造時期とも関連づけて検討する必要がある。

### （三）「水替」の存在

絵図に描かれた用水の開削時期を考えるさいに注意すべきは、北部と東部の領分境付近に三カ所、「水替渡す」とか「水替取」の注記がなされている点である。第二図や第三図をみればより明確である。これは当該村が、隣村から用水を引き入れた際に、水代（用水普請のための潰地）の代償として譲渡した土地を意味している。北部の四ヶ村用水取り入れ口の付近では、町田村の土地が他領の成田村に、磯部村の北部では、高尾神用水の流入に際し磯部村の土地が他領の三王山村へ割譲され（いずれも「水替渡し」、磯部村の南部では、蟹川用水の開削の際に、逆に他領の坪山村の土地が磯部村に割譲されている（「水替取」）。

こうした水代の代償地「水替」の授受は、このほかの村でも行われていたものと思われる。領分絵図には記されていないが、例えば、仁良川村と東根村の村境近くで四ヶ村用水が東根村に流入していた所に近くに「水替」という小字名が今も残っていること（「南河内町字界

⑭や、町田村と薬師寺村との村境で四ヶ村用水の水が薬師寺村に引き込まれる付近で、薬師寺村の土地が町田村側に組み込まれる形になっている（第七図「寛政七年九月町田村荒絵図」<sup>⑮</sup> 第四図「年不詳薬師寺村絵図」<sup>⑯</sup>）ことや、坪山用水が坪山村から篠原村へ入るところでも二カ所の「水替」がある（第十図および「貞享二年下坪山村外三カ村用水争論絵図控」）。ただ、これらの例はいずれも同じ秋田藩領内どうしの村か、または秋田藩とまったく無関係な他領分の村落の間で行われた「水替渡し」であったために領分絵図への注記が省かれたものである。「水替渡し」の問題は、村境の成立と用水の開削の双方に絡む事柄で、用水の開削時期を確定する上で重要な目安を提供する。これまで見てきた村々でも、四ヶ村用水・高尾神用水・蟹川用水・坪山用水などに「水替渡し」の問題が生じ、江川用水にはそのことが発生していない点に注意しておきたい。

## 二 西部台地とその周辺地域の開発

### （一）薬師寺村絵図と谷地の開発

天和期の領分絵図で、近世前期の秋田藩下野領の景観と開発の進展度を、治水利水施設の整備状況を中心に概観してきた。

その際、低地帯の灌漑のために田川から直接に取水する用水とは性格を異にする用水施設が、西部の台地および東崖下付近に存在することを指摘しておいた。次に、この点を詳細に見るために、第四図の「年不詳 薬師寺村絵図」を用い、薬師寺村を中心とする西部台地と

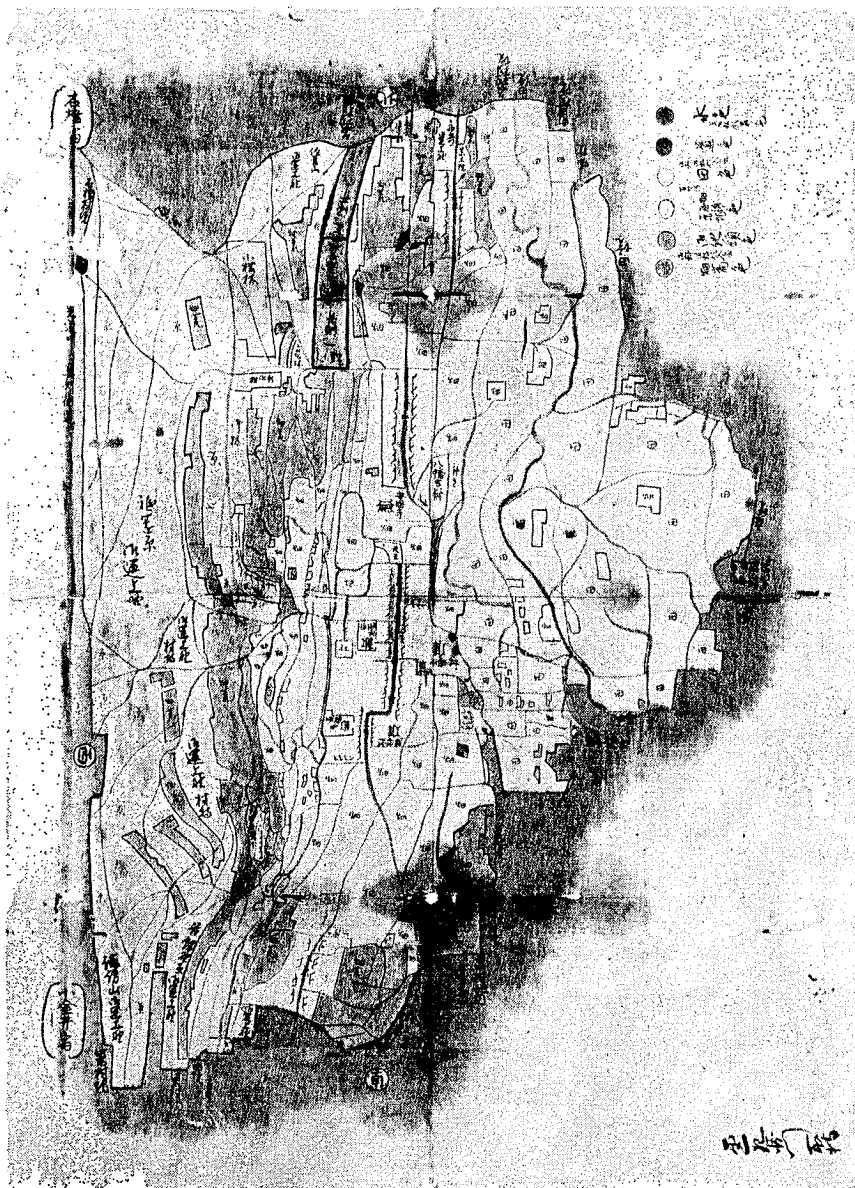
その周辺地域の開発状況を考察することにする。

なお、薬師寺村には、別に「延享元年（一七四四）九月薬師寺村絵図」<sup>⑰</sup>があるが、天保期と推定される第四図のほうが描写においてより具体的であり、しかも近世中期の薬師寺村の歴史的景観を伝える点で延享の絵図と比べ遜色ないことから、あえて第四図を用いることにした。

第一図で見たとおり、秋田藩下野領の西部に南北に連なる台地には、いく筋か枝状の細い谷が走り、谷の奥や周囲から流れ出る水が集まって細い川の流れを成していた。特に結城街道沿いの薬師寺の集落と旧薬師寺城跡のある台地の間を走る谷地には、奥の方に三重の溜池が築かれているのが確認できる。

第四図の薬師寺村の近世中期の景観を観察し、全体を四つの地域に分けて見ることができる。第一は、もっとも西側の原野で、ここは当時ほとんど入会秣場と御林とからなっている。第二は、中央を南北に走る結城街道に沿ってひらけた町場で、人家と社寺の多くがここに集中している。第三は、第一の地区と第二の地区との間に延びる谷地である。第四は、いちばん東側の沖積低地で江川用水が流れ、水田が開けている。

西部台地は、平地林と原野、集落とその周辺の畑地からなるが、薬師寺集落の西側の谷地では、奥に大型の堤で「一溜井」から「三溜井」まで連続する溜池を築き、そこから流れ落ちる用水によって谷田を開いている。溜池のない他の谷地が、水不足のために既に畑地化してい



第四圖 年不詳薬師寺村絵図（南河内町 後藤清二家蔵）39×53

るのに比べ、この溜池の有利さが際立っている。<sup>(18)</sup>

谷地に落ちる天水や湧水を利用した水田開発の歴史は古い。水量は限られているが、谷地の土壌は保水性に富み、小規模の水田ならば十分に灌漑できる。下流に開田が進み水不足が深刻になるまでは、それで十分に用が足りた。水量の不足が問題になって、灌漑を安定させるために、溜池が築造されるようになる。大型の貯水施設の存在は、下流でそれだけ開田が進んだことを示している。しかし、この谷地に大型の溜池が築造できたのは偶然ではない。延享期の絵図を見ると、「三溜井」のさらに奥、谷地の最上部の村境に、後世「玉椿井」と称された湧泉が注意深く記載されている。<sup>(19)</sup>ここから湧く豊かな水があった、はじめて溜池の築造も可能だった。台地内の谷地の開発は、こうした自然の条件に大きく左右されるものだったと思われる。

下野薬師寺や薬師寺城をはじめ縄文時代から奈良・平安期にいたる集落遺跡など、古代・中世の史跡の多くが、この谷地を囲むように分布していることは、ここに開発された谷田が、集落周辺の畑地とともに当時の社会の重要な経済的基盤を成すものであったことを示している(第十図)。

栃木県が国土調査法に基づいて、昭和五十七年から行った「土地分類基本調査」<sup>(20)</sup>によれば、この谷地の土壌は、火山灰や火山礫のような非固結性火成岩を母材とした水積性黒ボク土壌に属す大田和統(Offw)で、土壌断面図で見ると、表層四十センチ余までは、わずかにグライ斑や結核を伴う黒色の腐植質層で、その下層は黒泥層となっている。

粘性が強く地下水位が高いため排水に難点があり、畑地利用には適さない。水田裏作の導入は困難で、近世以後になると、下層に砂礫質を含む土壌をもった低地帯の生産力に比較し劣勢が目立ってくるが、それまでは僅かな水量で水田化できる有利な条件を持つことから、もっとも早期に水田の開発が進められた地区であったと考えられる。

## (二) 東部低地帯の開発

次に薬師寺村東部の沖積低地の開発について考えてみよう。薬師寺村ではここだけに水田が広々と開けている。北の多功村境から江川用水が流入し、曲折しながら南の田中村へ流れ落ちている。江川用水は、北の茂原村(現宇都宮市)・大山村(現上三川町)付近の谷地の水を集め多功村・梁村を経て薬師寺村に流入する小用水である。谷地の奥の溜池を水源としていることからみて、この用水の成立もかなり古いと考えられる。

ここで注意を要するのは、江川が薬師寺村に流入するに際して、前述の「水替渡し」が行われた形跡がまったくないことである。近世の村境が確定した後に用水の開削が行われたのであれば、とくに領分境でもあることから必ずや水代として潰れた土地の賠償が問題になる筈である。したがって「水替渡し」を行った形跡がないことは、この用水の開削が比較的古いものであることを証明するものである。<sup>(21)</sup>

これに対し、北東の町田村境からは、別に二本の用水が流れ入り江川に合流している。うち北側の一本は成田用水の残水、南側は四ヶ村



用水の分流である。そしてこの用水の導入に際して、薬師寺村が町田村に対し「水替渡し」を行っていたことは前述のとおりである。

つまり、四ヶ村用水が薬師寺村を灌漑するのは、江川用水よりも新しく薬師寺村と町田村の村境が確定した後のことであると考えられる。四ヶ村用水は、薬師寺村においては、既に存在した江川用水に水を補給する役割を担ったともいえる。両用水の開削時期は「水替渡し」の有無によって、近世初頭の「村切り」の以後と以前に、画然と区別されることになるであろう。

このように両用水の開削が、低地帯の開発に大きく貢献したことは言うまでもない。しかし、この地区の水田開発の歴史は、さらにこれら両用水開削以前の状況にまで遡って考えるべきである。

第四図と延享の薬師寺村絵図で、もう一つ注目すべきは、作成者が気を付けて慎重に描いた多数の湧泉の存在である。先に中央の谷地の「三溜井」の奥にある湧泉について述べたが、それ以外に七カ所、全部で十二の池泉が見られる。「三溜井」奥の「玉椿井」と同様に谷地に湧き出るものが、南部の芝村境に一カ所（三つ）、仁良川村境に一カ所あり、台地の周囲とくに東崖下に湧き出るものが北と南の村境近くに各一カ所と、中央の龍興寺の東崖下に一カ所（吉田カ池）、東部の低地帯に湧き出るものが町田村境に二カ所（内一カ所は二つ）ある。平地の湧泉は現在すでに消滅したが、東崖下の湧泉は、現在もいくつか痕跡を残している。その一つが龍興寺の東崖下の湧泉で、延享年間には「吉田池」と呼ばれていた。今は小さい池が二つ残っていて龍

王権現が祭られ、早のときには雨乞いの神事がおこなわれている。かつてはもっと大きな池であったとも想像される。

前述のとおり、谷地や湧水を利用して、小規模な水田が開かれた歴史は古い。江川用水や四ヶ村用水が開削される前に、薬師寺地区では台地内にある谷地の開発と並んで、東側崖下の水田の開発が、湧泉を利用して行われていたものと考えられる。薬師寺から仁良川・坪山方面にかけて、台地の東崖下沿いに小字名を調査すると、セセナギ・泉内・町井など湧泉に関わるものや、上谷田・根田・下根田・西谷・西根谷・下谷田・北谷田・前谷田などという谷田の存在を示すと思われる小字名が多数残っている<sup>(22)</sup>（第十図参照）。

この地域の土壌は、さきの栃木県「土地分類基本調査」によれば、薬師寺崖下辺りが、非固結性堆積岩を母材とする水積性の灰色低地土の金田統（Kane）に属し、表層は腐植に富んだ灰色で、作土下に斑紋・結核を生じ、やや粘質であるが排水性も悪くない。また、仁良川の崖下は、非固結性火成岩を母材とする水積性の多湿黒ボク土壌の鹿畑統（Kag）に属し、表層は頗る腐植に富んだ土壌で下層は黄褐色を呈している。いずれも水田に適し、しかも畑作も出来る恵まれた条件を備えている。

こうした条件があれば、崖下の湧泉から湧く僅かな量の水であっても、小規模の水田を開くことができたものと思われる。この辺りは、田川の氾濫による水の被害も受けにくいことも幸いした。吉田池も最盛期には、やや下流の「下影」辺りの水田まで灌漑したかもしれない。



その水掛かりの範囲が後に薬師寺村の地内となり、近くに弁天・熊野・白山などが祭られた。

しかし、水田がそれ以上に広がると、これだけの水では到底間に合わなくなる。上流から江川用水を開削してくることが必要になった。おそらく中世後半期のことであろう。近世初頭にはさらに四カ村用水が開削されて田川の水が補給されるようになり、各用水が複合し低地帯の全面的な開田が進められるに至ったものと思われる。

ところで、第四図や延享の薬師寺村絵図を見ると、湧泉のほとんどが村境にあることが分かる。これは素直に考えれば、水がかりの村の「村切り」の際に、湧泉のある位置を目安にして、それを取り込みつつ村境が決められていったと理解するほかない。絵図を見ると道や川・堀・田畑の畦などの線が村境の線と一致していることが多い。しかし、むしろ村の境近くに杜寺・墓所などと並んで、湧泉・溜池・堰・用水・土取場などの用水施設があることを見落せない。その用水によって開発された、ひとまとまとまりの地域共同体が、「村切り」を通じて近世の村に編成されていくとき、水源を村境に置くような村落景観が出来上がる。薬師寺村の村境に位置する湧泉についてはそうした理解が可能であろう。

### 三 田中村周辺の景観と開発

#### (一) 近世前期の開発状況

これまで天和期の秋田藩領分絵図によって、近世前期の秋田藩下野

領の歴史的景観を概観するとともに、近世中期の薬師寺村絵図を詳細に見ることから、西部台地およびその周辺における古代・中世以来の開発過程と、その利水施設のあり方を考察してきた。次に再び、田川の隣接地で水の影響を直接に被る低地帯の開発状況を検討しよう。

まず、「宝暦六年下野国河内郡田中村<sup>(23)</sup>絵図」から作成した概念図（第五図）をもとに、田川にもっとも近接した低地帯の村である田中村から検討を始めることにする。

先に領分絵図と郷帳を用いて概観したところによれば、十七世紀後半において同村の近辺の開発は、四カ村用水の開削を軸に、すでに相当地に進んでいることが予測された。しかも領分絵図を見るかぎり、治水用の堤は田中村の「平塚」付近と東根村の二カ所にすぎなかった。このことを念頭に置きながら第五図を用いて、同村の治水利水の状況とその開発過程について考察していこう。

第五図は通常の地図と南北の方位が逆である点に注意して見る必要がある。中央部分をいく筋かの枝状に分かれて南流するのが四ケ村用水である。下文挾村との境では東西の方向に分流し、用水が村境の一角をなしている。また左手上方（北西の方向）から斜めに流入し、いくつかに分流しているのが江川用水である。

この村の百姓屋敷地は、三カ所に集落を成している。天和の領分絵図（第一・二図）では、一番東の田川縁の集落の小名を「平塚」、中央の集落を「三谷」（地元では「みつや」と呼ぶ）、西側は単に「田中」と呼んでいる。地積図（第六図）に書かれる小字としては、「みつや」

と「田中」はなくなり、その付近には、「夜植田」や「古屋敷」の名が残っている。「平塚」の地名は、十四世紀末の鎌倉公方足利氏満寄進状（別願寺文書）<sup>24</sup>に、薬師寺荘内の地名として「福田」（今も町田村の小字名に「福田河原」がある）と並び記載されていることから注目される。

宝暦年間当時、既にほとんど村内全域に灌漑用水が展開し、水田化が進行しているが、その水利の基本構造は第二図と同じであり、根本的には第五図に見るような水利の構造がすでに十七世紀の半ばには出来上がっていたとも考えられる。

一方、村の北東部に二つの堤が見え、その間に田川の反対側の谷地賀村の土地が入り組んでいるのが分かる。二つの堤のうち南側「平塚」付近にある堤は天和期の領分絵図（第一・二図）にも記載されている。その北側、村の北東部を斜めにかすめるように築かれている堤は、天和期の領分絵図はもとより、享保期の領分絵図にも記載されていない。したがって享保から宝暦の間に築造されたという見方もできる。

たしかに、先に南側の堤が「平塚」地区を局所的に守るために築かれ、次いで北側の堤が整備されて田中村の中央部分「三谷」付近をも含めて水防施設が完備したと考えることも可能である。しかし、享保期を過ぎるまで北側の堤が整備されておらず、できたことで一気に中央部分の開発が進展したとは考えにくい。むしろ北側の堤も南側の堤とともに遅くとも天和期までには築かれていたと想定しておきたい。

その理由の第一は、北側の堤のある位置が谷地賀村地内であるため、

領分絵図（第一・二図）では省略されている可能性が頗る高いことである。その例は既に第一章で、東根村を防護する堤が、延宝年間からあるのに、場所が谷地賀村地内にあるために、わざわざ領分絵図から外されていたことを紹介した。

第二に、田川の本流が田中村の東側を流れるようになった近世にあつては、北側の堤なしに、その東側を流れる田川をコントロールすることはきわめて困難になっていたといわねばならない。第二図でも旧河道が「平塚」の堤の側をなめるように走っている。かつてこの辺りは田川が激しく濫流したところと思われる。

第三に、この堤の構造は、南北二つの堤があいまって、はじめて田川の流れを大きく東寄りに制御できる、そうした構造になっているものと思われる。これは田中村はもとより下流の下文挾村・東根村にとっても大変有利であり、そうした下流の村々の開発をも念頭に置いた計画的な工事のように思われる。

第四に、このようにして田川の流れを東寄りに変えたことによって、被害を受ける可能性があるのは対岸の谷地賀村である。残念ながら当時の谷地賀村の絵図が残っておらず、状況を確かめることができない。しかし、地形図や明治の地積図で見ると、田川はこの付近までは左岸（東側、谷地賀村）がやや高く、水は右岸（西側、田中村）の方へ落ちる傾向がある。したがって、右岸の田中村側の築堤は有効であり、左岸は増水時以外はあまり心配するにあたらな

第五に、増水時には、南北二つの堤の間が開いているので、そこか

ら余水が逃げて対岸の谷地賀村に被害を及ぼさない仕組みになっている。しかも、水が侵入し遊水池化される土地が対岸の谷地賀村持ちの土地であることは重要で、おそらくは当初より、ここには自然堤防以外に何もつくらず、非常時には遊水池化する協定をした上で、南北の両堤防はつくられたものと考えられる。

以上の考察により、両堤防は遅くとも天和期までに、おそらくはもっと以前、近世初頭にあい前後して築造されたものと推測するのである。この両堤防がなければ、「平塚」「三谷」の安定はなかったはずで、微高地「三谷」は、常に水の侵入に脅かされる地点につくられた、いわゆる「水屋」（水塚）であつたものと思われる。

第五図で、田中村の中央、四ヶ村用水が流れている辺りは、もともと田川がいく筋にも分かれて流れた旧河道の跡でもあろう。田川は上流の町田村付近から河床を掘り下げる低水工法で一本の本流にまとめられ、次第に東寄りに制御されてきており、その後旧河道を用水として整備し直したものであろう。

四ヶ村用水は、田中村の中央で分水し、そのうちの一流が「平塚」の堤を暗渠でくぐり抜け集落内に導かれ、そこを灌漑している。そこに近世中期における治水灌漑技術の進歩と余裕を見ることができると「平塚」への分水堰近くには八龍神が祭られていた。

## (二) 近世以前の開発

田中村の低地帯が全面的に開発されたのは近世を迎えてからと思わ

れる。しかし、一方、「平塚」は中世以来、この地区を開発する拠点の一つであつた。「平塚」から「下文挾」の東部にかけて、谷地賀村との村境に沿って田川の流勢によってつくられた自然堤防が今もわずかに痕跡を留めている。「平塚」や「下文挾古屋敷」はその自然堤防内につくられた開発拠点の一つであつたと考えられる。

低地帯の自然堤防内の微高地につくられた古い集落で「平塚」同様に中世以来の開発の中心になったと思われる箇所が、ほかにも「田中古屋敷」「町田古屋敷」「東根」「薬師寺下陰」「谷地賀箕輪」などに見られる。そこには土塁と堀を巡らした開発主の屋敷地の跡を伝える構えが今も残っている。

そこは田川の濫流にさらされた土地のように見えながら、肥沃な沖積土に恵まれ、自然堤防の内側に湧き出す涌水を利用し、小規模な水田（門田・前田）をひらくことができた。下層に砂礫層があるため排水の便も良く畑作も可能であつたと思われる。しかし地理的な制約は大きく、ここに留まるかぎり耕地と集落の拡大は究めて困難であつた。微高地ではあつたが、耕地も集落も田川の氾濫にあり、開発は何度も挫折し、堤も耕地もその度ごとに改修されてきたものと思われる。

第五図にある二つの堤の近世初頭における築造は、その長い水との闘いの歴史における大きな画期を成し、それ以後、田中村の低湿地の開発は勢いを増したものと考えられる。

明治の地積図をもとに作られた田中・下文挾大字全図（第六図<sup>25</sup>）を見ると、田中村の中央部分に比較的整然とした長方形の紋様をした地



割りが浮かび、近世の開発の際の計画的開田の姿が看取される。

なお、「平塚」地区は、天和の領分絵図（第二図）や宝暦の村絵図（第五図）においても一般の百姓屋敷とは区別されており、この地方の戦国期の土豪小領主の系譜を引き、中世末期から近世初頭にこの地区の開発に大きな役割を果たしたと思われる大島一族が居を構え、秋田藩下野領の在地陣屋が近世中期まで彼等とともに、ここに置かれていたことはきわめて象徴的である。<sup>(26)</sup>

田中村で「平塚」地区と並んで注目されるのは、天和の領分絵図（第二図）で「田中」と呼ばれていた西側の集落である。この一角も南北に細長く続く微高地があり、南端近くに集落がある。これが「田中」で、その辺りを地積図では「古屋敷」や「前田」と呼んでいる。

集落の近くには畑が多いが、その東側は低くなり水田が広がる。その水田と「田中」の集落を包み込むように、北西の薬師寺方面から江川用水が流入している。宝暦の絵図には江川の周辺にいくつもの「井」のマークが記載されている。おそらく湧水・池沼を示すものである。地積図によれば、この辺りに「鱸沼」や「久保田」の小字があるので、湿田ぎみの土地であったことが推測される。

栃木県の「土地分類基本調査」によれば、この辺りの土壌は、非固結性堆積岩を母材とし、水積性灰色低地土に属する藤代統（㊦㊧）で、土性は粘性で、表層は灰色でグライ斑があり、下層にも糸状・管状・点状・結核状斑が見られる。

中世の「田中」の開発は、微高地の畑とこの湿田を元に始められた

と思われる。保水性に富む土地は湧水を水源とし、池沼を排水して利用した小規模の水田化に向いていた。やがて中世後半には、江川用水が利用されるようになって、はじめて水田を拡大できるようになった。

地積図（第六図）を見ると、江川用水の流域と四ヶ村用水の流域とは、耕地の地割りがまったく異なっている。これは両用水とその水掛かり地とが、それぞれ別々の開発経緯をもっていることを物語るものである。

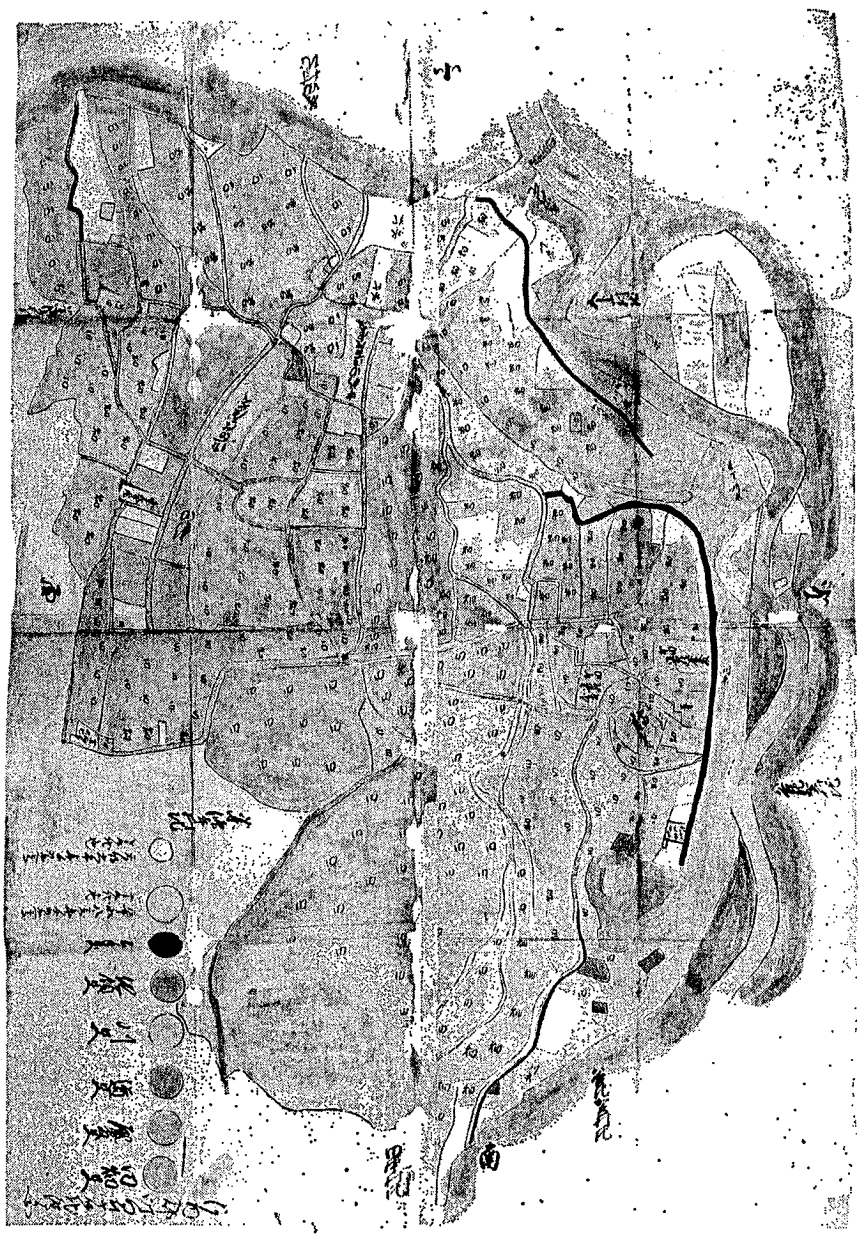
明治初期の土地所有状況からみると、第六図に示すとおり、田中村の中央地帯の四ヶ村用水の水かかり地の多くが、「平塚」地区の旧家の所有地であることから、「平塚」が中央地域の開発に積極的にはたっていた経緯を推測することができる。

中世以来の開発経緯の違いは、近世の村の編成後も、村内の小名として、それぞれの地名と集落を残すことになった。しかし、いずれの地も田川の氾濫の脅威は同じだった。中世の開発はともすれば、不安定耕地の拡大を招いていたから、近世初頭に前述の堤ができて、中央地帯の開発耕地が安定して、はじめて田中村は実質的に一つの村としてのまとまりを確保できたのである。

#### 四 四ヶ村用水と田川の治水

##### （一）四ヶ村用水の開削の事情

次に秋田藩下野領における田川流域の低地帯の開発全体に重要な意



第七圖 寛政7年9月河内郡町田村荒地絵図（後藤清二家蔵）64×93

味をもつ四ヶ村用水の開削と流域の治水について検討していきたい。  
四ヶ村用水については、その水かかり村の一つである町田村の史料に次のようにある。

#### 史料①

町田村用水之儀、田川水引来り天正年中、為水代町田村田地五反歩当村（成田村）高ニ入堰場相極置ひ、近年川瀬違候ニ付、新水口明ヶ申度旨町田村相頼ひ間、八年以前当村耕地之内ニ用水溝掘申候所、古来之堰場差置、右新溝之上ニ町田村々新堰仕立申ひ、  
(享保二年十月成田村他四ヶ村取替証文)<sup>(27)</sup>

#### 史料②

一、従先年、天正十八寅年迄ハ、五千石村々結城御領分也、  
一、同年極月十二日、堰面之水替成田村ハ八石三斗余相渡シ置也、  
(天正ヨリ末代マテ万扣帳)<sup>(28)</sup>

これによれば、成田村に取水堰が造られ、「水代」あるいは「水替」として、町田村の土地が成田村へ渡されたのは、「天正年中」あるいは、「天正十八寅年」のことで、その「水替」は、「田地五反歩」あるいは「八石三斗余」とされている。いずれも後世の伝承的な記述であり、そのまま信用するにはあたらない。

四ヶ村用水が、天正年中に開削されたかどうかは疑問もあるが、先に「水替え渡し」について検討してきた結果からみて、近世的な村落編成が一応済んだと思われる近世初頭のある時期に取水堰が整備され、「水替え渡し」の措置がとられた可能性は十分にある。

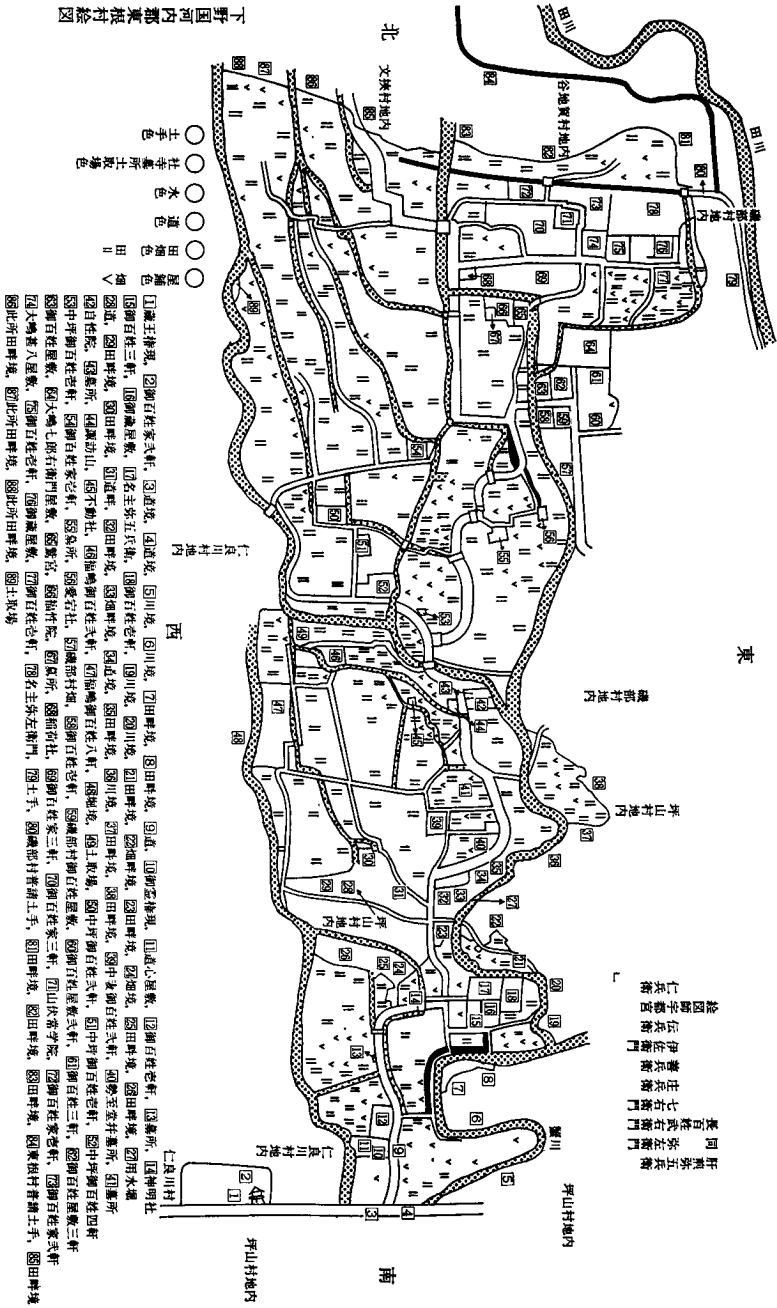
その近世初頭を天正の末頃から慶長年間にかけての時期と考えてまず間違いないであろう。この間に、羽柴秀康の結城晴朝の跡目相続があり、文禄年間には結城領においても太閤検地の実施があった。それが後の秋田藩下野領地域において、どのように行われたかは別にして、石高に結ばれたかたちでの「村切り」が進行したはずである。

慶長五年（一六〇〇）十二月秀康は越前国への転封を命ぜられ、翌年北之庄（福井）へ移り、その後は徳川家康の代官頭の伊奈備前守忠次の支配に入り、慶長七年、常陸の佐竹義宣が出羽国久保田（秋田）に国替えになるにおよんで、その飛地領となった。<sup>(29)</sup> 秋田藩（佐竹氏）領となつてからの最初の検地は寛永五年に実施された。

中世後半期に進んだ地縁的村落共同体の編成をうけて、天正年間以後になれば、各村の境の線引きもほぼできていたと考えられるし、それ以後天和期までに、水掛かりの四カ村（町田・薬師寺・田中・下文挾村）をはじめ下流の東根・上下坪山村等への用水開削が十分に展開し、低地帯の開発が大きく進展する時間的ゆとりもある。

四ヶ村用水の取水堰が置かれた成田村は、秋田藩領分外であるから領分絵図（第一・二図）には描かれず、近世の村絵図も残存しないため、当時の用水堰付近の様子やその上流部分の田川の流れを詳細に知ることはできない。<sup>(30)</sup> しかし近世中期のものと思われる町田村や対岸の五分一村の絵図、さらに成田・町田両村の明治期の地積図や迅速測図、昭和三十四年に撮られた航空写真<sup>(31)</sup>等を用いて推測することは可能である。

「延宝九年  
十月」  
(複製)



第八図 延宝9年10月下野国河内郡東根村絵図(神戸忠良家蔵) 95×186

それらによると成田村から町田村にいたる辺りには田川の旧河道の跡がいくつも残存していることから、かつてこの付近で田川が何度も河道を変えていたことが分かる。とくに四ヶ村用水堰の直前で田川は、小丘陵に突き当たりアルハベットのCの形に大きく湾曲していた。湾曲して五分一村から成田村に入った田川がもう一度五分一村へ出ようとする位置に堰が設けられ、標高差をうまく利用して四ヶ村用水の取水が行われている。しかし、この湾曲によって対岸に抱え込まれた土地が、村絵図や地積図で「田川向」と呼ばれながら、相変わらず成田村の地内であったことは、その位置にもともと旧河道があり、それが当時の村境を成していたことを想像させる。ここでの田川の湾曲は川の流勢を弱め取水口を開くための人工的な処置とも思われる。

しかし、天和期の絵図を見ると堰下の田川べりには、まだ堤防一つない。当時は長年にわたる土砂の堆積で出来た自然堤防と低水工法による河床の掘り下げを基本に、それにいくらかの補修を加えた程度の水防施設で凌いでいたものと思われる。前掲の史料①によれば、四ヶ村用水の堰付近で、元禄六年（一六九三）前後に田川の川瀬の変更があり、そのため宝永七年（一七一〇）頃に「古来之堰場」とやや異なるところに新水口を開き新溝を掘った、とある。このことをめぐって享保二年（一七一七）に成田村と四カ村（町田・薬師寺・田中・下文挾村）の間に出入りが生じ、妥協の結果、溢れ水が成田村地内に入らぬように、「田畑囲い之ため川原芝地之内、長十五間堰乱杭同様ニ杭木打之水除可仕由<sup>(33)</sup>」とあり、この頃も、まだ堰付近の治水は不十分で

あったことが分かる。

また、寛保三年（一七四三）に町田村の又左衛門から出された証文によれば、

一、当春普請仕申候場所、秋中ニ洪水ニ而堰下北川原共ニ破申候ニ付、大破御座候間、右式ヶ所外本田土手普請共三ヶ所之處、  
(以下略)<sup>(33)</sup>

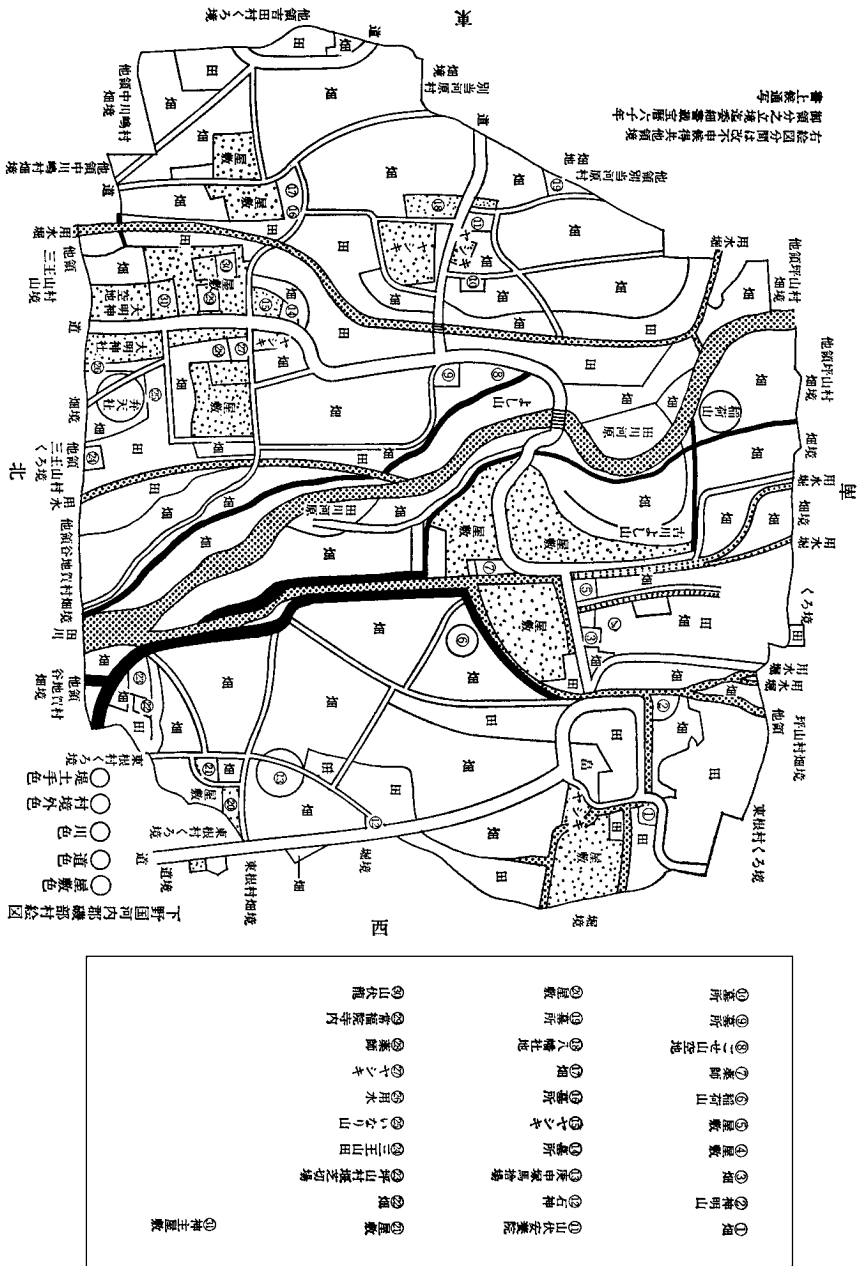
とあり、このころまでに少なくとも成田・町田両村の「堰下」「北川原」「本田」の三カ所に堤が出来ていたことが分かる。「寛政七年河内郡町田村荒地絵図」（第七図）や地積図に見られる三ヶ所の堤はこれと考えてよいであろう。五分一村の村絵図に見られる「国役御普請堤」などと共に十八世紀前半に造成されたものと思われる。この堤も「平塚」付近のと同様に霞堤である。

## (二) 田川の瀬替え工事

天和の領分絵図（第一・二図）で見ると、町田村は一番東の「町田村」、四カ村用水を挟み「中新田」、西に「新田」と三つの小名に分かれていたことが分かる。このうち「町田村」は寛政の村絵図（第七図）では「本田」、地積図では「古屋敷」と呼ばれ、また「中新田」は「中里」とも称されている。

いずれも低地帯のなかの微高地を選んで形成された集落で、「町田」または、「町」の地名は、もともと小さく区画された田を意味した。

天和期の絵図に「町田村」付近の旧河道のうねりが印象深く描かれて



第九図 宝暦6年下野国河内郡磯部村絵図（『南河内町史 史料編5 絵図』所収）

いるように、その周辺には田川の増水があれば忽ちにして川欠地となる流作場に等しい土地が多数あり、しばしば川瀬の変化が起こり、そのたびに荒地化と再開発が繰り返されていた。

町田村「本田」(または「古屋敷」)の北側や東側には、しばしば川欠地となったことが推測させる「前河原」「北川原」「向川原」「竜丁川原」「福田川原」などの地字が残る。しかも、これらの土地の土壤は付近でもかなり肥沃な方であった。<sup>(34)</sup>

近世初頭にこの付近に四ヶ村用水の堰が設置されたこと自体、この辺りの河道が一応安定したか、またはそれを機にさらに安定させようとする狙いをもったものであったと考えられる。天和期の直前、延宝七年(一六七九)に「北川原」の再開発願いが町田村の喜兵衛から出され、これを秋田藩が承認していることや、その後十八世紀半ばまでに町田村の霞堤が整備されていくのは、このへんの事情を物語るものである。<sup>(35)</sup>

一方、「町田本田」付近の治水が安定していなかったころ、既に町田村の西部の微高地である「中新田」・「新田」でも開発が始まっており、北から落ちてくる江川用水や成田堰用水の残水を用いた開発が平行して進んでいたと思われる。地元には、「中新田や新田は、水の被害を避けた本田の農民が移住して開発した。」との伝承が残っている。<sup>(37)</sup>

天和期の領分絵図で田川流域の低地帯を観察すると、もうひとつ注目されるのが、東根村と磯部村である。次に田中村下流の東根・磯部両村の開発の進展状況を第八図の「延宝九年東根村絵図」と第九図の

「宝暦六年(一七五六)磯部村絵図」<sup>(38)</sup>で見えていきたい。

天和の絵図(第二図)の上では、田川はこの辺りで比較的ゆるやかな直線的な流れをみせているが、これは当初からのものではなく、実は極端に蛇行していた旧河道も同時に描かれている。それは比較的近い過去における濫流の跡と見てよいであろう。

天和期の絵図で、東根村付近にみえる長大な防水堤の構えは第八図で既に延宝期から存在していたことが分かっている。また第九図によって磯部村付近の治水用堤防の状況からもさらにこれを確認することができる。

第八図によれば、東根村では防水堤で囲われた内側に水が湧き、この水が先ず村内を灌漑しているところへ下文挾村方面から下りてくる四ヶ村用水が合流し、さらに南部では蟹川用水も加わり、村内を縦横に用水路が展開している。

これらを総合判断すると、延宝年間以前、近世初頭に、それまで濫流を繰り返し河道の定まらなかった田川は、東根村の北側の位置に築造された二重の堤(外側は谷地賀村地内)で流れを大きく東寄りに修正され、磯部村の中央部を抜ける、これも前からあった旧河道の方向に川瀬を変更され、またほとんど同時期に、やはり旧河道の一つを利用して、蟹川用水の開削が行われた可能性が大きい。

自然のままにしておいた場合、この辺りの地形からすれば、下文挾方面からくる田川は、東根村の中央を抜け、下坪山村の西部方面へ向けて平坦な低地帯一体に氾濫する傾向をもっていたと思われる。



この工事によって治水利水の安定を見たのは単に東根村だけではなく、それまで田川の濫流に悩まされ続けていた下流の上下坪山村・篠原村・網坂村・延島村等の村々であったと考えられる。治水の安定が生じると、堤の北や西側からも、下文挾・仁良川方面をとり流入してくる四ヶ村用水や江川用水の灌漑効果も上り、沖積低地の開発を促進した。

しかしながら、この流路の変更によって、磯部村は、村の中央部を田川の本流が貫流することになり、同村の磯部地区と塚越地区とは、田川を挟み対岸どうしで向かい合う不自然な形となり、さらに村内北境に蟹川用水の取水堰を持つことから水防上の困難を抱えることになった。前掲の宝暦期の村絵図（第九図）はこの村における堤防の重大さをよく示している。

第一章から述べてきたことからすると、下野国河内郡南部の田川下流域において、四ヶ村・蟹川の両用水の開削、田中・東根村付近の霞堤の建設、田川の瀬替え工事等、近世初頭に行われた一連の治水利水工事は、その影響の及ぶ範囲からして単に秋田藩下野領内に留まるものではなく、一大名の意志を超えた規模で、かなり広域にわたる田川下流域の低地帯の開発計画として実施された可能性が濃厚である。しかし、これを推進した主体勢力とその施策を支えた社会的条件等については今後の検討を要する課題である。

## むすびに

地域史の研究のために、その歴史的・地理的景観を近世の絵図をもとに復原する作業を試みることは以前からの念願だった。しかし、これは種々の条件が揃わないと容易でなく、なかなかその機会に恵まれなかった。

今回、たまたま栃木県河内郡南河内町の町史編纂事業を手伝うことになり、近世部会の同僚と共同して史料の調査研究を進めることになった。この過程で同町内から発見された多くの領分絵図や、村絵図に出会ったことから、これを軸に地域研究をする良い機会を得ることができた。その成果の一部は、既に『南河内町史 史料編5 絵図』（平成二年三月刊）として刊行されている。

小稿はこの史料編を使用した中間報告であり、編纂事業の今後の進展にいささかなりと寄与することができれば幸いである。文責はあくまで筆者にあるが、研究の過程では、近世部会の同僚の諸兄に種々の御教示をいただき、また編纂室と史料所蔵者の皆さんには様々な御便宜をおはかりいただいた。末筆ながら記して感謝申し上げるしだいである。

## 註

- (1) 木村礎編著『村落景観の史的研究』（昭和六十三年十二月、八木書店）は、利根川流域の低地帯を対象に古代から近世にまでいたる景観の歴史的研究を一貫しておしすすめた優れた共同研究であり、景観の復原による地域の歴史学的研究の今日を代表する成果である。なお、同書に木村氏の筆になる村落景観の研究史と方法の整理がまとめられている。

- (2) 地租改正事業の際に作成された地積図をはじめ、明治十九年に参謀本部陸軍部測量局が編集した(第一軍管)地方迅速図、その他各時代の町村管内図、国土地理院発行の地形図等との比較が重要である。
- (3) 秋田藩領の村は南河内町管内に、町田・田中・下文挾・薬師寺・仁良川・東根・磯部・絹板・花田の九カ村、小山市の管内に山田・飯田・上萱橋・下萱橋の四カ村がある。
- (4) 奈良の東大寺、筑紫の観世音寺とともに三戒壇の一つ。創建について天武天皇(白鳳)八年、皇后の病氣平癒を祈願して建立されたと伝えられるが、ほかに、天智天皇九年説、大宝三年説もある。天平勝宝元年懇田地五百町を認められ、十世紀頃まで寺運おおいに栄えたが、十一世紀頃からの衰運は著しく、暦応二年足利尊氏が全国に安国寺と利生塔を置いたとき、寺号を改めたと伝えられる。
- (5) ここで使用する領分絵図と村絵図の多くは、後述のとおり『南河内町史 史料編5 絵図』に収録されているものをお断りして利用させていたでいる。
- (6) 秋田県蔵、『南河内町史 史料編5』(以下、史料編)所収絵図番号1。
- (7) 秋田県蔵、史料編 絵図番号2。
- (8) 秋田県蔵、史料編 絵図番号3。
- (9) 享保改革に伴う新田開発の奨励策を受けて行われた鬼怒川西部、現在の茨城県猿島郡三和町・結城郡石下町にかかる飯沼の開発の必要から開始された。享保九年十二月に着工、翌年七月に完成した。
- (10) 秋田藩下野領のうち薬師寺村は、天保三年六月、天領と旗本白須甲斐守知行所の二給に領知替えになった。
- (11) 「元禄三年上下萱橋村野論裁許絵図」、秋田県蔵、史料編 絵図番号58。
- (12) 神戸忠良家蔵、史料編 絵図番号43。
- (13) 武田の旧臣で徳川家康の代官頭として、幕府の関東農政の中心にあった伊奈備前守忠次が行った治水普請の工法である。
- (14) 町役場に保管される「改正地引全図」をもとに、町史編纂室が作成。史料編 付録図番号2。
- (15) 後藤清二家蔵、史料編 絵図番号12。
- (16) 後藤清二家蔵、史料編 絵図番号5。
- (17) 野口邦祐家蔵、史料編 絵図番号4。
- (18)・(19) この両項については、注17の延享元年の薬師寺村絵図がより注意深く記している。
- (20) 栃木県企画部土地対策課編集発行。
- (21) 「水替」は近世後期になるにしたがい土地の割譲による処理から「水替銭」による金銭上の処理へ移行し、「水替地」の問題は表れなくなるが、この段階ではまだそれを考慮する必要があると思われる。
- (22) 「南河内町字界図」、注14参照。
- (23) 同図は現在原本が所在不明になっており以前に撮影されていた写真から複製した概念図を使用せざるをえない。史料編 絵図番号15。
- (24) 「明徳二年九月八日鎌倉公方足利氏満寄進状」に  
奉寄 名越別願寺  
下野国薬師寺庄半分 除福田平塚両郷  
逸見中務大輔寄進地 事  
とあり、以前に逸見中務大輔の所領であった地が別願寺に寄進されている。
- (25) 南河内町役場蔵、史料編 絵図番号17。
- (26) 大島一族の名は、「永禄九年二月二十三日結城晴朝宛行状写」(『結城

市史史料編・古代中世」に仁良川郷のうちに十貫文の地を与えられた「一疋一領の土」として大島与十郎の名が表れて以来、しばしば結城氏との関係を示す元亀・天正期の文書にみとめられる。また、秋田藩領となつてからも、『梅津正景日記』によれば、肝煎となつた大島氏の父親である大島助兵衛が足輕に取り立てられ「開之内百石」を与えられたという。以後、大島氏は下野領支配の地代官として、近世中期まで活躍する。

(27) 秋山通良家蔵、文書番号735。

(28) 秋山通良家蔵、文書番号926。

(29) 「年不詳 下野御領知従往古之大方聞書」(秋田県庁総務部蔵)によれば、佐竹氏の下野領拝領は慶長十年十月十七日、実際に伊奈備前守から渡されたのは翌年のことで、拝領後の最初の「竿入れ」は寛永五年、梅津主馬によってなされたとしている。

(30) 野口八郎平家蔵、史料編、絵図番号59。

(31) ここでの史料はいずれも南河内町史編纂室の収集になるものを用いた。  
(32) 注27に同じ。

(33) 「寛保三年九月 持普請連判之事」(秋山通良家蔵、文書番号74)。

(34) 「地誌編輯取調草稿」(原本には、ただ「草稿必要ナリ」とあるのみで表題を欠く、秋山通良家蔵、文書番号111)によると、町田村の地味は、字古屋敷(粘真土交、肥、二等)、字前河原(砂交、肥、一等)、字北河原(砂石交、肥、三等)、字向河原(砂石交、瘠、四等)、字福田河原(砂石交、瘠、四等)、字中里(野土、瘠、五等)、字西浦(野土、瘠、七等)。

(35) 「延宝七年三月十五日 梅津茂右衛門達」秋山通良家蔵、文書番号9。

(36) 成田村の北、下梁村の田川から取水し成田村「堀ノ内」「本田」付近

を灌漑している。

(37) 近世部会の町田村の史料調査の際の聞き取りである。

(38) 塚原甚一家蔵、史料編、絵図番号41。

(本学助教教授・国史学)

#### (付記)

初校終了後、享保二年九月に薬師寺・町田・田中・東根の四ヶ村が立会で作成した「四ヶ村用水堰」の絵図が発見された。「四ヶ村用水と田川の治水」の(一)で用いた史料①の関連史料と考えられる。これによって、当時の堰の位置と田川の流れが明確となった。当時の流路は、明治の地積図でみるよりもずっと東寄りを流れ、さらにその東側、成田と五分一村の村境に、「古川」と呼ばれる古い流路の跡が描かれている。しかもこの古川は既に慶安年間から堰留められたと記されている。これによって田川は一定の目的をもって流路を村境付近から西寄りに人工的に変えられたことが分かる。そして西寄りにできた本流に斜めに洗堰が設けられ、四ヶ村用水が取水されている。その位置は寛政年間の町田村絵図(第七図)や地積図でみるよりもかなり北側であった。

田川はその後、享保期から寛政期にかけて、自然の流勢によるか、多分に人工的な手を加えてというべきか、ともかくもさらに流路を西寄りに変え、同時に大きく湾曲して流勢を調節しつつ、地積図にみる位置に堰を築き直すことになったと思われる。享保期の堰の位置については、この絵図ではじめて確認を得たわけであるが、堰が築かれ用水が開削される経緯については、本文で行った推定を大きく変更する必要があると認めないので、これを付記するにとどめる。